

2021年11月7日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「主は羊飼、わたしは羊」

聖書：詩編23：1～6

詩編23編の作者は、神と私の関係は、羊飼いと羊の関係であるという。羊飼いは羊一匹一匹を群れの中で大事に育てる。青草のしげる野原へと導き、水のある場所を確保しておく。外敵である狼や熊が現れたら身を挺して守り、迷子になれば、見つけるまで探し回り、怪我をすれば速やかに介抱してあげる。羊飼いは、羊の命を守り、成長を見守る役割を担っている。しかし“羊”自身は、そのことをどれだけ感じているか？ たぶん特別な感謝な気持ちはないであろう。毎日ご飯が食べられ、危険から身を守ってくれていることに感謝なく生きていてのではないか？ では私たち人間は、神様に対してどれだけ感謝を表している者か。私たち自身も余り羊と変わらないのではないか。ただ、詩編23編は神への気づきのゆえに讃歌の言葉がつづられている。

「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」とは、神にゆだねた人生を歩んでいるという信仰告白である。人間と羊の違いは、客観的に自分を振り返って羊飼いの業を感じ取ることができることにある。羊は客観的に見ることはできない。でも、私たちが、客観的に神の恵みに気づかずにいるのであれば・・・、それは、羊となんら変わらないことになる。私たちは、そういう弱さがあるから、互いに声をかけ合い、励まし合い、助け合う必要がある。神の恵みは、太陽が誰の上にも等しく注がれているように、神の恵みは、等しく注がれている。私たちは礼拝を重んじ、神に賛美をお捧げしていくものでありたい。

羊は羊飼いに何をもたらすものか？ ウール（羊の毛）、ミルク、そして肉を提供する。でも聖書に記されていることは、羊飼いが羊になりその役割を担う。自ら血を流す。羊の代わりに毛を切られ、肉を割かれ、血を流す。本来、羊である私たちが当然のように負うべきものを。イザヤ書に「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。」(53:6-8)。

私たちは、羊飼いに養われている羊であるが、本来なら養われた報いが求められる。毛を切られ、肉を割かれ、血を流すもの。しかしその報いを、イエス・キリストが負ってくださった。そのことを覚え礼拝を捧げる。教会は、イエスという羊飼いに養われている羊の群れである。(神谷)